

# 大名から侯爵へ

—鍋島家の華—



## 凡例

一、本図録は共催特別企画展「鍋島家伝来能装束」「大名から侯爵へ—鍋島家の華—」  
〔平成一九年一月六日(土)～二月一日(日)〕の出品作品を掲載した。出品作品は全  
て財団法人鍋島報效会の所蔵である。

一、作品の保護と会場スペースの都合により、必ずしも展覧会会期中に掲載作品が全  
て出品されているとは限らない。

一、本展における展示作品の一部に、掲載されていないものもある。

一、日本語の作品解説には、図版番号・作品名・時代・法量を、また作品リストには、  
作品名に続き英語表記による、名称・種別・時代を付した。

一、作品解説は、財団法人鍋島報效会の協力を得て、田邊三郎助氏・長崎巖氏・加藤寛  
氏の調査及び指導のもと、門脇幸恵(国立能楽堂)・兩角かほる(泉屋博古館分館)  
が分担した。

一、掲載写真は、財団法人鍋島報效会より提供を受けたが、青木信一(能装束)、西村  
敏・本城克彦(有職装束及び一部工芸作品)による作品を含む。

一、落款、箱書、付属資料に関しては、原則として原典にある旧字体、旧仮名遣いを用  
い、改行は「」で示した。



1. 剔箔地松藤模様縫箔



2. 白縪子地花車鉄線模様縫箔



5. 腸箔地花車散銀杏模樣縫箔



12. 胸箔地丸紋散模樣縫箔



22. 褐地蜀江模様袷狩衣



24. 紫地竹模様給狩衣



32. 紅地龍丸模様側次



34. 鎏金地唐花繫模様半切

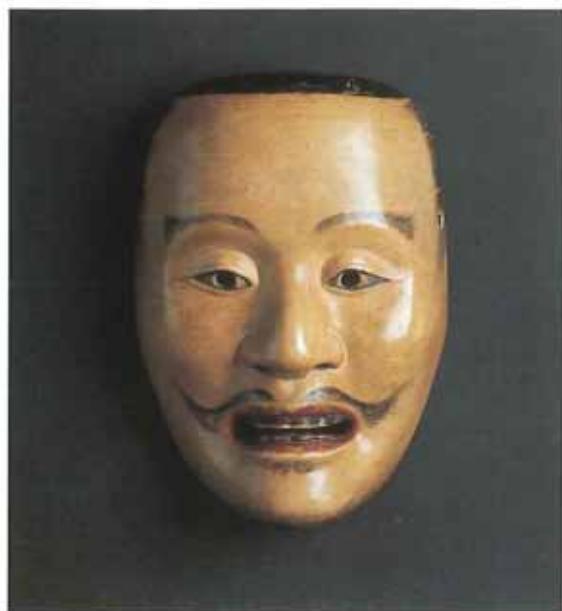


33. 紅地立浪模様半切

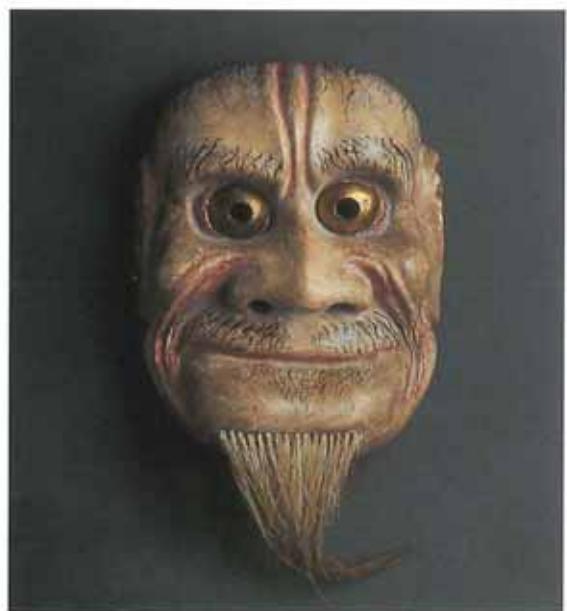
37. 朝倉尉(表)  
朝倉尉(裏)  
朝倉尉(折り紙)



37



39. 平太



38. 悪見尉



64. 藍麻地杏葉紋付小紋袴



家紋部分



82. 紫地桐九模樣小挂



81. 濃茶地雲立涌花菱幸菱藤模樣小挂



84. 白地牡丹立涌模樣紋紗小挂



83. 白地藤尾長鳥九模樣小挂



108. 夜会服



109. 仮装舞踏会服



110. 仮装舞踏会服



122. 黑漆塗雪薄竹雀紋桜枝散蒔絵厨子棚



126. 納梨子地葵紋散葵唐草蒔絵沈割箱



127. 納梨子地杏葉紋揚羽蝶紋散鼻紙台

# 作品解説

## 鍋島家伝来能装束

響が現われると考えられている。裏地は紅平絹。三代綱茂所用と伝わる。

### 1 胸箔地松藤模様縫箔

どうほくじまつぶじちらようねいはく

江戸時代・一八世紀  
丈一四七・〇×折六九・〇

後身頃の裾中央から立ち上がる松の古木、その苔を湛えた枝は両袖まで届き、常盤の緑を湛える。それを覆い尽くすばかりに、幾筋もの藤の大花房が垂れかかる。松と藤の刺繡部分は一時代前の作品から切り取られ、金の胸箔地に縫い付けられ、刺繡を補い全体をまとめている。金地ながら色彩を押さえ、見事に格調高く、かつ華やかな作品に仕上がっている。裏地は白小節絹。天保十四年の「御能御面其外道具」控（以下「御道具控」）には、四代吉茂所用と記されているが、その以前の作品にも思いを馳せる一領である。

### 3 白襦子地花入七宝繫梅立木模様縫箔

しらしゅうじはなりしほうつなぐらきらきらようねいはく

江戸時代・一八世紀  
丈一四一・〇×折六七・五

白の襦子地全面に花入七宝繫模様を金箔で摺り表わし、見事に花をつけた梅の古木数本が、背面左裾から右上方へ向かい肩から両袖へと繡い表わされる。意匠や刺繡表現には一七世紀の特徴も見られるが、背面上部の梅の表現に、やや後の時代の感性も見て取れる。萌黄の濃淡と黄唐茶の幹に、紫、赤、白の梅花と色数を抑えても華やぎを損ねず、女役にも男役の着付にも向く作品に仕上がっている。裏地は紅羽二重。二代綱茂所用と伝わる。

### 4 紅練縫地松竹梅模様縫箔

べにねりみじょうちくばいもようねいはく

江戸時代・一七一八世紀  
丈一四四・五×折六七・五

白襦子地全面に金箔で霞を表わし、八重菊と笹を刺繡で配する。模様の散らし方は一八世紀の意匠ではあるが、笹や菊の葉には一七世紀の表現も窺える。可憐なモチーフでありながら、どこか生命力に満ちた刺繡表現による見飽きない構図の作品である。裏地は紅羽二重。三代綱茂所用の「白鉄十両」のうちの一両と伝えられる。

### 5 胸箔地花車散銀杏模様縫箔

どうほくじはなぐるまちらいよろくよろいはく

江戸時代・一八世紀  
丈一四九・八×折六八・〇

枝垂桜と牡丹を載せた源氏車、中宮のサロンへでも向かうのであろうか。また、大きな銀杏の葉は神域からの届け物を意味するのであろうか。ついつい物語世界へと誘われる作品である。「御道具控」によれば「御胸鉢 地金牡丹 鴨脚車縫模様」と記されている。鴨脚は銀杏の別称だが、この大きな銀杏の表現は、特に鴨の足に見立てたくなるのも頷ける。裏地は緋練絹。三代綱茂所用と伝わる。

### 6 白襦子地菊 笹模様縫箔

しるしゅうじじきくさもようねいはく

江戸時代・一七一八世紀  
丈一四一・〇×折六七・〇

白襦子地全面に金箔で霞を表わし、八重菊と笹を刺繡で配する。模様の散らし方は一八世紀の意匠ではあるが、笹や菊の葉には一七世紀の表現も窺える。可憐なモチーフでありながら、どこか生命力に満ちた刺繡表現による見飽きない構図の作品である。裏地は紅羽二重。三代綱茂所用の「白鉄十両」のうちの一両と伝えられる。

### 7 薄葱襦子地御簾小葵入子菱葛籠模様縫箔

あさぎしゅうじじみすこあおいいりこひしつたきらきらようねいはく

江戸時代・一八世紀  
丈一四一・〇×折六七・五

白襦子地に金箔で細かく霞が摺り表わされ、鉄線唐草の中に松、牡丹、杜若、菊、紅葉など四季が盛り込まれた花車が配される。背面左裾から左腰を空けて斜めに右へと立ち上がり両肩へ広がる意匠は、元禄年間（一六八八—一七〇四）から享保年間（一七一六—一七三五）へかけての小袖模様の特徴である。縫箔は能装束の中でも唯一小袖の影響を受けるが、小袖の流行よりやや時間をおいて、その影期に、国許で分類された可能性も考えられる。

薄い水浅葱地の腰から上に金銀箔で描き出された御簾を下ろし、裾部分には、金銀の箔で入子菱、銀箔で葛唐草を

■協力者一覧（五十音順）

伊海孝充  
小高理予  
加藤寛  
河村まち子  
小林彩子  
佐々木佳美  
正田麻衣子  
角美弥子  
高尾耀  
田中淑江  
田邊三郎助  
水上嘉代子  
森下愛子

監修 長崎巖

写真撮影 青木信一

編集 西村敏・本城克彦

泉屋博古館分館 国立能楽堂

制作・印刷 便利堂

デザイン 門井幸子

発行日 平成一九年一月六日

発行 独立行政法人 日本芸術文化振興会  
財團法人 泉屋博古館

